新宗教における「病」の意味
――世界救世教を事例として――

武　井　順　介

はじめに

新宗教において，家庭の災厄や自己の病気（このような苦悩を以下「病」と表現する）を「取り去った」り，「治療」したりする宗教的実践は多々ある。例えば世界救世教（以下，救世教と略記）の「浄霊」，天理教の「つとめ」と「さずけ」，真光系教団の「真光の業」，真如苑の「接心」などがそれである。

確かにこれらは「病気治し」といわれているが，単に「病」を「治す」のみではない。宗教的実践にはそれぞれの新宗教がもつ宗教思想が多分に内包されている。そのため信者はこれらの宗教的実践を通して，経典などのテキストからではない方法で教団の教義や世界観を学んでいる。つまり，これらの宗教的実践は，それぞれの宗教の中核をなす「重要な行為」といえる。したがって，この重要な行為はある程度固定化され，教団内で脈々と受け継がれていくものである。

日本の新宗教では，このようないわば「救済」について多くの論考が提示されている。對馬路人らは，このような救済について「生命主義的救済観」という概念を提起した（對馬ほか 1979: 92-115）。これは新宗教の救済観に着目し，黒住教，金光教，天理教，大本教，霊友会，生長の家，立正佼成会，PL 教団，創価学会，世界救世教，天照皇大神宮教の11教団を対象にして，宇宙の本体，宗教的根元者，人間の本性，生と死，悪と罪，救済方法，救済状態，教祖の 8 つの視点からそれぞれの「教え（＝教義）」を分析した結果，析出された概念

である。對馬らはこの「生命主義的救済観」が，日本の新宗教の構造的特徴としてあげられるとした。

この論考の発表は今から30年以上も前である。しかし，現在でも新宗教を対象にした研究を行なう場合，検討課題として取り上げられている[1)]。これは對馬らも当時指摘した新宗教の救済観に関する個別研究の少なさのためであろう（對馬ほか 1979: 92）。そのため概念の再検討が行なわれたり，この概念を通した個別の事例研究が行なわれたりしているといえる。

そこで本論でも，この「生命主義的救済観」を検討するための準備として世界救世教を対象としてその病観をみてみたい[2)]。具体的には，教祖岡田茂吉の人生史と経典（『天国の礎』），さらに世界救世教いづのめ教団の布教用機関紙『光明』を対象にして[3)]，そこでの「病」の原因（＝災因，病因，病観）とその救済の意味内容について明らかにしていく。

１．岡田茂吉の人生史からみる救済としての病観

ここでは，救世教の教祖である岡田茂吉（1882-1955）の人生史の特徴から救世教がもつ宗教的思想を，特に病観に着目しつつその構成要素を明らかにしたい。

救世教は，岡田によって創立された新宗教教団である。その宗教的思想の特徴は，岡田が歩んだとされる人生と深い関係がある[4)]。その多くは，芸術的要素と「病」的要素，宗教的要素の３点に還元できる。

芸術的要素としては，岡田が1896年に東京美術学校予備ノ課程に入学し画家を志したこと，1902年頃から書画・骨董の店を開くべく，銀座の夜店の骨董店をのぞき鑑識眼を養いつつ，蒔絵を習い，のちに上野の美術博覧会に出品したこと，小間物小売商「光琳堂」を開業し，自作の蒔絵を販売していたこと，その後「岡田商店」を開業し，そこで「旭ダイヤモンド」を発明，世界10カ国で特許を取得，「流行は岡田商店から」と評判になり大きな収益をあげたこと，などをあげることができる（宗教法人世界救世教編 1983a: 53-58; 63-72; 92-

119; 147-178)。

「病」的要素としては，画家を志してすぐに悪性の眼病におかされ退学することになり，画家への夢が断たれたこと，画家への夢が断たれてすぐに肋膜炎肺結核にかかり医師から不治の宣告を受け，薬物の副作用を経験していたため菜食療法により奇跡的に治癒したこと，結婚後すぐに種々の病気を経験し，婦人病以外の病気をほとんど患ったこと，などをあげることができる（宗教法人世界救世教編 1983a: 58-62; 135-143)。

宗教的要素としては，無神論であった岡田が会社の倒産，妻の死などを経験し，1920年大本教に入信，中断があったものののちに神霊研究に没頭していったこと，1931年，千葉県鋸山山頂にて天啓を受けたこと，などをあげることができる（宗教法人世界救世教編 1983a: 199-207; 233-239; 242-248; 251-370)。

上記 3 要素の内実を簡潔に書くならば，芸術的要素とは岡田がもつ芸術への志向性，「病」的要素とは自身の患った病気や薬物，治療を通した「近代医療」への不信感，宗教的要素とは大本から得た知識とその活用いえるだろう。

さて，このような岡田の人生からどのような病観が生まれ，救世教の教義となったのだろうか。津城寛文は，救世教の病観に関して「浄化作用」，「医学と薬害」，「浄霊」として整理している[5)]。「浄化作用」とは，「内部」の毒素を外部に排出すること，さらに排出する際にともなう苦痛のことをいう。この観念にもとづき人間をみると次のようになる。人間は日々の生活の中で汚物（薬や農薬を用いた食品によるもの）を蓄積しており，それが心身にとっては毒素，霊的には「曇り」となる。本来人間には自然治癒能力が備わっているため，その力によって体内に堆積した毒素を外部に排出できる。排出の際には，心身に病気や苦痛，不幸や災難が起こるが，のちに健康・幸福になる，といったことである[6)]。

次に「医学と薬害」である。これは上記した人生史における「病」的要素と「浄化作用」に関連が深い。岡田は，医学と薬について次のように考えている。本来人間には自然治癒能力があるにも関わらず，医学は病気治療という名で「病気の抑制」を行ない，体内に毒素を蓄積させていく。薬も同様である。こ

れを救世教では「薬毒」という。これらは，岡田が不治の宣告を受けた時に，肉食から菜食中心の食生活に変更し，不治の病が良好になったことや婦人病以外の病気をすべて経験，その際，薬による治療では一向に回復しなかった経験から考えだされたことである[7)]。

最後に「浄霊」である。「浄霊」とは，手のひらから「神霊的放射能」を照射し，あらゆる苦難の原因とされる霊の「曇り」や病気の原因となる肉体の毒結を解消する治療法である[8)]。これは救世教の中心的な宗教的実践であり，一般的に「手かざし」という名で知られている。日常生活において体内に蓄積した毒素や「曇り」は，人間に本来備わっている自然治癒能力で排出できる。この排出を救世教では「浄化作用」というが，「浄霊」はこの「浄化作用」を促進する役割をもつとされている。岡田によればこの「浄霊」は，「霊界の夜昼転換」によって霊界の火の要素が現世にあらわれ，火素を中心とする人間の霊気が増大したため，あらゆる浄化作用が促進し可能となった方法とされる（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 111-116）。

以上，岡田の人生史を手掛かりとしてそこに内包されている病観を構成する要素をみてきた。これらはそれぞれ独立したものではなく，相互に関連している。上記したように，岡田の人生は病との格闘の歴史（あるいは経験）といってもよい。岡田は，自身のこのような経験にもとづき救世教の教義を編纂した。その結果の１つが，「浄霊」という宗教的実践を中心とした治病である。

このようなカテゴリーにまとめられた救世教の病観を構成する要素であるが，具体的に信者が用いている教団資料にはどのように記述されているのだろうか。岡田の小論が多く掲載されている『天国の礎』を手掛かりとしてみてみよう。

２．『天国の礎』にみる「病」の意味

ここでは，救世教の信者が信仰生活においてもっともみることの多い『天国の礎』を頼りに，そこに記述されている病観をみてみたい。特に前章で扱った岡田の人生史には記述されていない病観を明らかにしたい。

『天国の礎』は，「宗教編（上下巻)」,「浄霊編（上下巻)」,「社会　救世自然農法編」,「芸術編」の計 6 冊から構成されている。これらは，岡田が残した数多くの「教え」の中から代表的なものを集めたものである。なかでも「浄霊編」には，救世教が信者に対して伝える「病」に関する記述が多くみられる。

取り上げられている内容をみてみると，第 1 は近代医療批判にもとづく病観である。これは近代医療＝悪といった病観を提供している。

> ……そもそも病気とは何ぞやというと，神示によれば，人間が先天的および後天的に保有せる毒素の，自然排除作用による苦痛を名づけたのである。ところが，これに気づかなかった人類は，これと反対の解釈をしたのが，既成医学の観念である。したがって医療を施せば施すほど反対の結果となり，病状はますます悪化するのである（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 34)。

> まず人間何かの病気に罹るや，早速お医者さんに診てもらう。するとお医者さんは二，三の服み薬をくれるとともに，近頃は大抵注射をするからそれでちょっとよくなるので，これで治るものと思って毎日通うか，お医者さんの方から来てもらうかするが，実際は十人中八，九人は思うように治らないもので，運よく一時治ってもしばらくすると必ず再発するのは誰も知る通りである。勿論薬という毒で一時抑えをするだけで，本当に治ったのではないことはいつもいう通りである（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 50-51)。

第 2 は具体的な病の原因やその治療方法にもとづく病観である。これは前述の近代医療批判にもとづくものでもある。例えば，癌を毒素の溜まった獣肉を大量に食すことによる肉食病とし，癌にならないためには，中和作用のある野菜を相当量食す必要があるといったように（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 277-278)「自然」的要素や毒素，さらに「浄化作用」を強調

する。

近来日本人に最も多い病気として近視眼がある。……これは延髄附近に集溜せる毒結が，眼の栄養としての血液送流管たる血管を圧迫することによって，眼が栄養不足に陥るためである。そうして眼鏡を用うるため，眼の力が漸次弱り眼鏡中毒となる。したがっ近視眼を治癒するには，毒結溶解とともに眼鏡廃止が根本的である（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 268）。

歯槽膿漏は……委縮腎による余剰尿が，背部より肩部，淋巴腺におよび，それが浄化によって歯齦から滲出されるのである。その際血液も混入せるが，尿毒が血液に混じるからである。また歯がグラグラ動くことがあるが，これは歯齦に毒素集溜のためである。本医術によれば簡単に全治するが，歯科医は治療の方法なく多くは抜歯するが惜しい者である。……歯槽膿漏を治すためには，毎朝歯を磨くときに歯よりも歯齦を磨くようにする。最初血膿がでるがしばらくすると血膿が出なくなり，肉が締まって歯は強靭になるのである（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 274）。

この他，具体的な病への言及は，インフルエンザ，発熱，嘔吐，下痢，浮腫，眩暈，不眠，憂鬱症，咳嗽，耳鳴り，喘息，リュウマチ，婦人病，火傷など身体的なものから精神的なものまで多岐にわたる。さらに具体的な病の中で岡田は天然痘を強調し，天然痘を抑止するための種痘こそがすべての病の原因であると批判する（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 329）。

……種痘によって天然痘毒素は消滅したのではない。単に然毒（著者註：天然痘のこと）排除の力を弱らせたまでであるから，然毒はそのまま体内に残り，これが種々の病原となる。……然毒は時を経ていずれかの個所に

集溜し固結する。その浄化作用が感冒であり，また種々の皮膚病，疑似小児麻痺，脳膜炎，小児の腺病質等であり，その他の病原となることもある。……人類から天然痘を駆逐するには，薬剤を全部海へ捨ててしまうよりほかはないが，しかしそうしても急には効果は現れない。というのはなにしろ何世紀もの間薬詰めにしてきた人間であるからで，まったく解消してしまうには少なくとも二，三代はかかると見ねばなるまい。しかし漸次的に薬毒が減少するから，たとえ発病してもそのつど軽く済むようになるのは勿論，わが浄霊法によればその人一代で済むのである（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 110-111）。

第 3 は個々人の日常生活に起因する病観である。これは個々人の諸々の「悪い」行ないが「罪けがれ」として霊の「曇り」となり，堆積するということである。この堆積したものが病の原因として身体や精神，さらに霊的にあらわれるとする。岡田はこれを後天的な「罪けがれ」という（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 327）。

いかなる人間といえども，生来，絶対罪を犯さないでいきてゆくということは，でき得べからざることである。しかし罪にも大中小，千差万別あって，例えば，法律上の罪もあれば，道徳上の罪もあり，社会的な罪もある。また行為に表れる肉体的な罪もあり，心で思うだけの精神的罪悪もある。……競争に勝つとか社会的に成功するとか，とにかく優越的行為は敗北者から怨まれ，羨望される。これらもその恨みによって一種の罪となるのである。また，無益な殺生をするとか，怠けるとか，人を攻撃するとか，物質を浪費するとか，朝寝坊するとか，約束を違えるとか，嘘言を吐くとか，いうようなことも不知不識侵す一種の罪である（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 328-329）。

第 4 は先祖や祖先と関連した「霊的」な病にもとづく病観である。これは大

別して 2 種類ある。1 つは，祖霊が子孫の過ちを正す方法として病を与えるというものである。これはすなわち，祖霊が子孫に対し「浄化作用」を行なうということである。

> 本来祖霊はわが子孫に対し，幸福であり家系が栄えることを願望しつつある結果，その目的に背馳するところの原因である過誤や罪悪を子孫に行わしめざるよう，邪道に踏み入らぬよう不断の警戒を怠らないのである。したがってその子孫がたまたま悪魔に魅入られ不善を行うとき，それを戒告するためと，すでに犯した罪けがれの払拭とを兼ねて行うが，その手段として種々の災厄病気等を与える（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 305）。

もう 1 つは，祖先の「罪けがれ」が子孫に反映するというものである。これは，第 3 の個々人の日常生活に起因する病観で取り上げた後天的な「罪けがれ」と対比させ，岡田は先天的な「罪けがれ」という（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 327）。さらに，岡田は現代に生きる人々は，多数の祖先の綜合体と考える。したがって，その多数の祖先の「罪けがれ」が現代に生きる人々に堆積していると考えている（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 327）。

> 現在生きている吾々個人は，突然と湧きいたところの，いずれにもかかわりのない存在ではなく，実に何百人か何千人か判らない，多数の祖先の綜合されて一つになった，その尖端に存在呼吸する一個の生物であって，それが，無窮に継承されていく中間生命の，時間的個性の存在である。大きく観れば，祖先と子孫とを繋ぐ連鎖の一個であり，小さくいえば，親と子を繋ぐ楔子でもある（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 327）。

……大部分の人間は，生存中における罪の行為によるけがれが相当多いので，霊界において厳正公平なる審判に遇って，大方は地獄に堕ちて行くのである。地獄界に堕ちた精霊は，罪に対する刑罰の苦難によって，わずかながらも一歩一歩向上してゆくのであるが，その際罪けがれの浄化による，残渣ともいうべき霊的汚素が，現世に生を営みつつあるその子孫に向かって，絶えず流れ来つつあるのである。それは祖先の綜合体である子孫個人が，罪けがれを分担するという，一種の因果律的贖罪法である（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 328）。

以上 4 点に分け『天国の礎』に記された病観をみてきた。病の原因（＝病因・災因）は，近代医療や薬毒，個々人の日ごろの行ない，先祖や祖先の業などによる霊の「曇り」とされ，その病因・災因を「治療／治癒する方法（＝救済）」として，「浄霊」や「浄化作用」があるとされている。ただし，この「浄霊」は病を治療することが主目的ではなく，人々の不幸を払い幸福を与えることだとしている（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 430-433）。

3．体験談からみる「病」と浄霊の意味

ここでは，救世教の機関紙『光明』に掲載されている奇跡体験談（以下，体験談と略記）を通して語りからみる「病」と浄霊の意味を明らかにしたい[9]。その際，体験談に語られている内容とその語られ方＝「語りの形式」に着目したい。

新宗教における体験談は，信者自らの宗教的奇跡（奇蹟）体験を表出させたものとして位置付けることができる。この体験談は，主に教団が発行する機関誌に掲載されている。救世教においても布教用機関誌『光明』と信者用機関紙『新生』，信者用雑誌『季刊 IZNOME』に体験談が掲載されている[10]。

以下，2003年から2007年の 5 年間の『光明』を用いて，計170話（170名）の体験談を対象に病と浄霊の意味をみていきたい。

体験談をその内容に着目すると「身体的な病」,「精神的な病」,「信仰」の３つに分類できる。「身体的な病」とは，身体にあらわれる疾患について語られたもののことを指す。例えば，以下がその事例である。

……夫と近所の総合保健センターで，胃・肺・大腸のがん検診を受けました。……結果が封書で届き，……「胃ガン」の四期と書かれていました。……２日後に病院へ行き，内科の医師より「早く検査を受けた方がいい」と言われ，……検査を受けることになりました。その足で浄霊センターへ行き，皆さんに胃ガンのことを伝えると，元気になるようお祈りしてくださり，親身に浄霊を取り次いでくださいました。

（世界救世教いづのめ教団 2007）より一部抜粋

次に「精神的な病」とは，精神にあらわれる疾患について語られたもののことを指す。以下がその事例である。

娘の食欲が減り，痩せ始めたのは……，高校へ入学してすぐのことです。少しぽっちゃりしていた娘は，痩せていくことに喜びを感じていたようですが，体重が27kg まで減ってしまいました。娘を病院に連れて行ったところ,「拒食症」と分かり,「ストレスの蓄積が原因だろう」と言われました。不安を感じた娘は，今度は過食をするようになったのです。……病院に入院しても，薬の副作用で娘の症状はひどくなる一方でした。

（世界救世教いづのめ教団 2006）より一部抜粋

最後に「信仰」であるが，これは華道（山月流）や「日々の生活での感謝」などについて語られていたもののことを指す。以下，その事例である。

……浄霊センターで,「毎日の生活の中で『ありがとう』と口にすればするほど，感謝できる事柄が身の周りに自然と起こってくる」という話を聞

いたり，資料を何度も読むうち，私もじっこうしてみたくなり……。……毎日の生活の中で，「ありがとう」とくり返し口にするようになってから，私の心に変化が現れました。トイレが汚れていて掃除する時でも，“トイレをきれいにすることで心もきれいになる。ありがとう”と自然と思えたり，今までならストレスを感じ不満に思っていたことも，感謝の気持ちで受け止められるようになってきたのです。

（世界救世教いづのめ教団 2004）より一部抜粋

このような体験談170話を３つの分類からみると「身体的な病」125名（73.5％），「精神的な病」29名（17.1％），「信仰」16名（9.4％）と『光明』では「身体的な病」について中心に語られていることがわかる[11]。

表１　体験談にみる語りの中心

語りの中心	人	％
身体的な病	125	73.5％
精神的な病	29	17.1％
信仰	16	9.4％
総　計	170	100.0％

次に「語りの形式」をみてみよう[12]。170話の体験談をどのような形式で語られているのかみてみると「病－近代医療－回復せず－浄霊－回復」（医療懐疑型１），「病－近代医療－浄霊－回復」（医療懐疑型２），「病－浄霊－回復」（浄霊型），「その他」の４つに分類できる。「医療懐疑型１」は82名（48.2％），「医療懐疑型２」は58名（34.1％），「浄霊型」は13名（7.6％），「その他」は17名（10.0％）となった[13]。

表２　体験談にみる語りの形式

語りの形式	人	％
病－近代医療－回復せず－浄霊－回復	82	48.2％

病－近代医療－浄霊－回復	58	34.1%
病－浄霊－回復	13	7.6%
その他	17	10.0%
総　計	170	100.0%

以上のように体験談を「語りの内容」と「語りの形式」に着目して類型化した。結果，内容では「身体的な病」や「精神的な病」のように「病」に関して中心的に語られていることがわかる。次に形式では，「医療懐疑型１」や「医療懐疑型２」，さらに「浄霊型」のように「病からの回復」がほとんどであることがわかる。

このように体験談の多くで「浄霊」が何らかの「病に効き」，「治癒」するものと語られている。前章でみた『天国の礎』の中の「病」の意味として「先祖・祖先との関係性」があったが，体験談の中ではその記述は少ない。

さらにその内容をみると「自分が浄霊などで浄まれば，自分が良くなる」といった「いま・ここ」にいる個々人に病因と救済を集約する傾向にあり，それを個々人の実践（浄霊）によって「治療」し，「治癒」させると考える信者が多い。つまり体験談を通した浄霊は現在的，個人的な病因と救済を提供するものと考えられているといえよう。

おわりにかえて――救世教における「病」の意味

以上，岡田の人生史，『天国の礎』，信者の体験談から救世教の病観をみてきた。

岡田の人生史から生まれた病観は，「浄化作用」，「医学と薬害」，「浄霊」といった救世教の教義の中心となるものである。これらは，上記したように岡田の病との格闘の歴史の中から選び考えだされた観念といえる。

次に『天国の礎』からは，①（薬を含む）近代医療＝悪といった図示から近代医療批判にもとづく病観，②従来近代医療によって治療されていた具体的な

病に対し「自然」的要素や毒素，浄化作用を病の原因や治療法にあげた病観，③善行悪行といった個々人の日常生活における行ないに起因する病観，④先祖や祖先と関連した「霊的」な病にもとづく病観，の４点を指摘した。

布教用機関紙『光明』に掲載されている信者の体験談からは，その内容を「身体的な病」，「精神的な病」，「信仰」といった３つに分類したが，なかでも「身体的な病」について多く語られていることが明らかとなった。また，その「語りの形式」は，「病－近代医療－回復せず－浄霊－回復」（医療懐疑型１），「病－近代医療－浄霊－回復」（医療懐疑型２），「病－浄霊－回復」（浄霊型），「その他」の４つに分類したが，なかでも「医療懐疑型１」と「医療懐疑型２」が多く，最終的に「浄霊」による「回復」が主であったことが明らかとなった。

つまり，岡田の人生史や『天国の礎』による救世教の病観の内実は，現在／過去的（過去との連続性），個人／（先祖や祖先との）共同的な病因・災因と救済といえるが，信者の体験談が掲載されている『光明』では，個々人の現時点での身体的・精神的な病の救済といった現在的，個人的な病因・災因と救済が中心的であるといえる。

しかし，救世教では2006年から「新たな実践」を取り入れている。その実践とは，「想念の実践」と「感謝の想念の実践」の２つである。「想念の実践」とは，①神から分霊を賜っている神の代行者であることを自覚すること，②無数の先祖の綜合体であることを自覚すること，③苦しんでいる先祖を認め，言い聞かせること，④岡田に先祖の苦しみを委ね，浄め，救ってもらうこと，⑤救ってもらった先祖の気持ちを受け止め，認めること，⑥先祖とともに生かされ，育まれ，御用にお使いいただいていることの感謝を，岡田にささげること，である（「想念の実践」に関する教団資料より）。つまりこれは，病因・災因と救済において過去とのつながり，連鎖，連続性を意識することに力点がおかれているといえよう。

さらに「感謝の想念の実践」では，①神が用意した万物に対し，「ありがとう」の言葉をもって感謝を捧げること，②これは，習慣的に使ってきた挨拶の「ありがとう」ではないこと，③感謝の心を込めた「ありがとう」の言葉の必

要性，といったこと（「想念の実践」に関する教団資料より）が強調されており，これは，救済の方法を提示しているといえる。

つまり，「新たな実践」では，「自分が浄まれば，先祖・祖先と自分が良くなる」といった過去的（過去との連続性）で共同的（先祖・祖先との）な病因・災因と救済を提供しているといえよう。

ただし「新たな実践」は，全く新しいものではない。この「新たな実践」は，祖先・先祖とのつながりを前面に押し出したものであり，これに関しては，すでに『天国の礎』の中に記されている。では，何が「新しい」のか。それは，今までの救世教では信者の体験談に記されているように「浄霊」による「病」の「回復」が強調されていた。しかし，この「新たな実践」では，それはあまり強調されずに「先祖・祖先」とのつながりが強調されているところが「新しい」といえる。

いずれにせよこれらが，救世教やその信者の病観にどのような変化をもたらすのか。この点に関しては他稿に譲りたい。

註

1）例えば2002年6月の「宗教と社会」学会第10回学術大会では，「生命主義的救済観――今なお有効な視点たりうるか？」と題しワークショップが開かれた（林 2003; 樫尾 2003; 中牧 2003; 對馬 2003; 山田 2003; 弓山 2003）。また，2008年9月の日本宗教学会第67回学術大会では，「日本新宗教の生命主義的救済観と教導システム――災因論と救済論」と題し，パネルが組まれ報告がなされた。その他，「生命主義的救済観」の検討やこの概念に関わる論考として，（桂島 1995; 前川 2004; 村田 2005; 永井 1992; 永井 1993; 島薗 1992; 對馬 1981a; 對馬1981b）などがある。

2）準備としたのは，具体的に「生命主義的救済観」をみるのではなく，救世教（あるいはその信者）がもつ病観をみること，また救済観を直接的にみるのではなく，病観をみることに起因する。これは救世教が「浄霊」という宗教的実践を中心にして宗教活動を行なっているためである。つまり，救世教では「病」（災因）を「浄霊」によって治す（＝救済）ために，「病」に対してどのような意味付与を行なっているのか探る必要がある。また本論は，多くの蓄積がある「生命主義的救

済観」に対する論考の中でも，事例研究のあまり行なわれていない世界救世教をとりあげることによって，研究の拡充をはかる目的もある。

3）教団発行の資料を用いて「病」の意味を分析する意味は，（武井 2009）を参照されたし。また（武井 2004）では，信者の語りにもとづき作成したライフヒストリーから信仰を受容獲得するプロセスを明らかにした。その中で主題化してはいないが，「病」の意味についても触れている。

4）紙幅の関係上，教団が提示する岡田の人生史をすべて掲載することはできない。救世教が発行する教祖伝（教祖の人生史）としては（宗教法人世界救世教編 1983a; 1983b）がある。

5）津城は病観という言葉ではなく，疾病観という言葉を用いている。（津城 1990）を参照のこと。

6）岡田の考える「浄化作用」についての詳細は（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 169-220）を参照されたし。

7）岡田の薬毒論に関しては，（世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編 1993c: 94-107）を参照されたし。

8）（津城 1990: 358）を参照のこと。もともとは，大本の修行法の1つで治病や健康法，浄化法などとして用いられていた「鎮魂」を岡田が大本の宣伝使のころに実践化した。

9）新宗教を対象にした体験談研究には多くの蓄積がある。秋庭裕と川端亮，芳賀学と菊池裕生は真如苑の研究（秋庭・川端 2006; 芳賀・菊池 2007）を，孝本貢は妙智會，立正佼成会，霊友会の研究（孝本 1978; 1980）を，谷富夫は創価学会の研究（谷 1994）を，渡辺雅子は天照皇大神宮教，立正佼成会の研究（渡辺 1980; 1991）を，寺田喜朗は生長の家の研究（寺田 2009）をそれぞれ行なっている。このように各教団の体験談分析は一定の成果を出しているが，救世教の体験談研究は，多くの蓄積があるわけではない。しかし，樫尾直樹の一連の研究（樫尾編 2000; 2001），隈元正樹の研究（隈元 2008）など少なからず研究は行なわれている。上記は，日本の救世教を対象にしたものであるが，それ以外にもブラジルの救世教を研究対象にし体験談を扱ったものとして（渡辺 2001; 松岡 2004）がある。本章は，拙稿（武井 2009）にもとづいているため詳細は拙稿を参考にされたし。

10）『光明』は，毎月発行され信者が非信者の家にポスティングしているためここでは「布教用機関紙」とした。『新生』と比べると『光明』は教団内部の出来事よりもむしろ現代社会で起こっている出来事などを取り上げている。例えば『光明』には医療，子育て，自然食などの現代的な情報，信者の体験談，有識者へのインタビューなどが掲載されている。他方『新生』には，式典や祭典の様子，信者の

体験談などが取り上げられている。しかし，信者が『光明』を読んでいないわけではない。教団内部の情報を把握したい場合，信者は『新生』を用い，社会一般の情報は『光明』を用いるというようにどのような情報を得たいのかによって使い分けているようにみえる。

11）分類をする際に１つの体験談の中に語られている内容を詳細に分類した。結果，１つの要素だけで語られているものもあれば，複数混在する形で語られているものもあった。その際，重視したのが「何が最も中心的に語られているのか」である。

12）「語りの形式」とは，体験談から具体的記述を捨象し要素（トピック）を取り出し，それを体験談の展開の順番に並び替えたものである。体験談の中に何らかの病気を患った／患っているという記述があればそれを「病」とした。病院に通院した，あるいは病院から投薬されたという記述があればそれを「近代医療」とした。救世教で浄霊を受ければ「浄霊」とした。また，患った「病」が治癒したと語られていれば「回復」，治癒しなかったと語られていれば「回復せず」とした。事例を交えた詳細なカテゴライズに関しては（武井 2009）を参照のこと。

13）「医療懐疑型１」は，「病」を患い，「近代医療」を受けたが，「回復せず」，諸々の理由で救世教に出会い「浄霊」を受け，「回復」していくというものである。この形式では，体験談の中に近代医療では回復できなかったこと（あるいは悪化したこと）が記されている。「医療懐疑型２」は，医療懐疑型１とは異なり，体験談の中に近代医療により回復できなかったという記述がみられなかったものである。「浄霊型」は，体験談の中に近代医療にかかった痕跡がみられなかったものである。「その他」は，３類型にあてはまらないものをすべてを位置づけた。

参考文献

秋庭裕・川端亮，2004,『霊能のリアリティへ――社会学，真如苑に入る』新曜社.

芳賀学・菊池裕生，2006,『仏のまなざし，読みかえられる自己――回心のミクロ社会学』ハーベスト社.

林淳，2003,「コメント＆討議」『宗教と社会』9 別冊：101-105.

樫尾直樹，2003,「生命主義的救済観の終焉＝目的？！――現代日本の新宗教における概念的有効性の検討」『宗教と社会』9 別冊：62-74.

樫尾直樹編，2000,『現代日本社会の宗教性／霊性の研究Ⅰ――世界救世教①』慶應義塾大学文学部社会学専攻樫尾研究会.

樫尾直樹編，2001,『現代日本社会の宗教性／霊性の研究Ⅱ――世界救世教②』慶應義塾大学文学部社会学専攻樫尾研究会.

桂島宣弘，1995,「「病気」と「直し」の言説――赤沢文治・近代への路程」江戸の思想編集委員会『江戸の思想　1』ぺりかん社：101-117.

隈元正樹，2008,「浄霊の「奇跡」と「想念の実践」による天国化――世界救世教における人生問題の解釈と解決に関する教団戦略」東洋大学社会学部西山研究室『現代日本における人生問題の解釈と解決に関する宗教戦略の比較研究』2006-2007年度科学研究費助成金基盤研究（C）成果報告書，東洋大学：95-105.

孝本貢，1978,「民衆のなかの先祖観の一側面（1）――霊友会系教団の場合」桜井徳太郎編『日本宗教の複合的構造』弘文堂，357-382.

孝本貢，1980,「民衆のなかの先祖観の一側面（2）――妙智会『信仰体験記』の分析」下出積興編『日本における倫理と宗教』吉川弘文館，279-303.

前川理子，2004,「近代の生命主義――自然主義への応答と宗教」池上良正・小田淑子・島薗進・末木文美士・関一敏・鶴岡賀雄編『岩波講座　宗教　第7巻　生命』岩波書店：143-173.

松岡秀明，2004,『ブラジル人と日本宗教――世界救世教の布教と受容』弘文堂.

村田充八，2005,『社会的エートスとカルヴィニズム』晃洋書房.

永井美紀子，1992,「修養と呪術――癒しをめぐる二つの志向」島薗進編『救いと徳――新宗教信仰者の生活と思想』弘文堂：117-152.

永井美紀子，1993,「新宗教における修養性と呪術性――真如苑を事例として」『年報社会学論集』6: 167-178.

中牧弘允，2003,「会社宗教における生命主義的救済観――松下幸之助と船井幸雄」『宗教と社会』9 別冊：90-100.

世界救世教いづのめ教団，2004,『光明』218A，世界救世教いづのめ教団.

世界救世教いづのめ教団，2006,『光明』241B，世界救世教いづのめ教団.

世界救世教いづのめ教団，2007,『光明』255B，世界救世教いづのめ教団.

世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編，1993a,『天国の礎　宗教　上』世界救世教いづのめ教団出版部.

世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編，1993b,『天国の礎　宗教　下』世界救世教いづのめ教団出版部.

世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編，1993c,『天国の礎　浄霊　上』世界救世教いづのめ教団出版部.

世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編，1993d,『天国の礎　浄霊　下』世界救世教いづのめ教団出版部.

世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編，1993e,『天国の礎　社会　救世自然農法』世界救世教いづのめ教団出版部.

世界救世教いづのめ教団経典編纂委員会編，1993f，『天国の礎　芸術』世界救世教いづのめ教団出版部.
宗教法人世界救世教編，1983a，『東方の光　上巻』世界救世教出版部.
宗教法人世界救世教編，1983b，『東方の光　下巻』世界救世教出版部.
島薗進，1992，『現代救済宗教論』青弓社.
武井順介，2004，「一信者の「語り」からみる宗教的信念体系の受容プロセス――世界救世教の信者を事例として」『立正大学大学院年報』21：165-175.
武井順介，2009，「新宗教教団における体験談の諸相――世界救世教を事例として」『立正大学社会学論叢』8: 1-14.
谷富夫，1994，『聖なるものの持続と変容――社会学的理解をめざして』恒星社厚生閣.
寺田喜朗，2009，『旧植民地における日系新宗教の受容――台湾生長の家のモノグラフ』ハーベスト社.
對馬路人，1981a，「松下祖神道における生命の系譜論」『日本仏教』53：35-52.
對馬路人，1981b，「新宗教における至上神の観念――太陽神の神性をめぐって」池田英俊・大濱徹也・圭室文雄編著『日本人の宗教の歩み』桜風社：313-327.
對馬路人，2003，「趣旨説明」『宗教と社会』9 別冊：46-50.
対馬路人・西山茂・島薗進・白水寛子，1979，「新宗教における生命主義的救済観」『思想』665，岩波書店：92-115.
津城寛文，1990，「Ⅴ　実践　世界救世教」井上順孝・対馬路人・西山茂・孝本貢・中牧弘允編『新宗教事典』弘文堂：358-359.
山田政信，2003，「ブラジルにおける生命主義的救済観――新宗教とペンテコステリズム」『宗教と社会』9 別冊：74-90.
弓山達也，2003，「生命主義的救済観と現代宗教」『宗教と社会』9 別冊：51-62.
渡辺雅子，1980，「救いの論理――天照皇大神宮教の場合」宗教社会学研究会編『宗教の意味世界』雄山閣：98-116.
渡辺雅子，1991，「ブラジルにおける立正佼成会の展開と女性信者の生活史」『明治学院論叢　社会学・社会福祉学研究』85：259-293.
渡辺雅子，2001，『ブラジル日系新宗教の展開――異文化布教の課題と実践』東信堂.

（2012年 1 月18日受理，2012年 2 月 2 日採択）